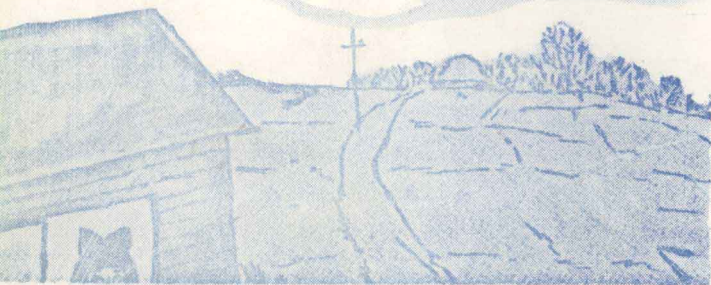


紙 風 船



このたび、父がはからずも叙勲の榮に浴しました。私にまがりなりに今日があるということは、いうまでもなく父のおかげですが、その父をこれまでお導びきくださった、いいきれぬほどの皆様のご支援があつたらこそ、父はこの佳き日を迎えることができたのだと思い、心から厚く礼申しあげます。時あたかも、この小品集が記念出版のようになったの幸せです。ここに、父とそれらたくさんの皆様に対し、謹んで感謝の情を捧げるものでございます。

昭和49年1月8日 石井 樹氷

石井樹氷句集

紙風船

句集 紙風船

価 1100 円

著 者 石 井 樹 氷

印 刷 昭和 48 年 12 月 24 日

発 行 昭和 49 年 1 月 8 日

推 薦 浦和市本太 2 の 1 の 22
紫 の 会

発 行 所 川口市原町四番地
俳句遊園地

印刷所 鴻巣市原馬室 4893
トキタ印刷

序

石井樹氷君は、若々しい作家である。彼が「紫」に投句を始めてからでも、すでに二十年になるから、「曲水」時代を含めるとかなりの俳歴であるのだが、いかにも若々しい精神に満ちている。彼自身の言葉によれば、その未成年時代にしめくくりをつけるために過去の句稿を整理して、一本にまとめたということ、約九百句にのぼる作品をひっさげて、私に下駄を預けられた。拝見すると、思い出のなつかしい句に溢れているのだが、まず第Ⅰ部は、樹氷君の療養時代で、ここで彼は肺を切除され、美しい恋を得て第Ⅱ部へとつながつてゆく。この間のものから六十余句、青春を病臥するせつなさ、一喜一憂流されてゆく歳月、とき澄まされた神経のしたたり、純真で一途なもの思いが痛いほど伝わってくる。彼は自分の作品について、『風景写生よりむしろヒューマン的

なパーソナル俳句』で『人事が多い』、といっていたが、素材の面では確かにそのようで、この背景にあるものはすぐリアルな観察眼である。例えば第Ⅰ部の

排菌者真赤な金魚買つてくる
 晩涼の野を行く柩軋むなよ
 明日は断つ肋に団扇のせ仰臥
 喉乾ぶ夜の遠蛙もうやめよ
 手術食腑にあり草いきれが重い
 癒えて干すシャツにきらめく貝ボタン

第Ⅱ部の、

葱臭い手でネクタイを直される
 テラテラ夕焼釘嚙む街の靴屋さん
 電球に指あたたためてガリバン切る
 油まみれの夜業の足袋を子が脱がす

餅よこせデモの末尾に恩師がいる

ペンペン草力む母見て子が糞る

などに見られる具象の力感。しかし彼はまた「紫」が提唱した「写実に立つ浪漫」の履行者でもあつたのであつて、リアルな素材を抱えながら、それを巧みに浪漫化してみせている。その浪漫の内容は一つには童心への指向である。七音の詩をもつて『童画の世界』を描いて見せてくれる、小動物や物語のなかの人物が登場する。第Ⅰ部の

ポチ轢かれ霧が重たい木曜日
病む胸に抱かれ仔猫は瞑るよ

第Ⅱ部の

汗を拭く街のチルチルミチルかな
赤いキノコにつんつん狐の雨が降る
春宵の龍宮に灯がともりけり
兎のこどもが怖い夢みた十三夜

燠の炎人買いがまた笛を吹く

葱坊主いつかロミオに変声期

ピノキオに若葉雨降る遊園地

リスの仔が抱えて遁げた赤い壺

など微笑ましいが、更にその深層を堀り下げてゆくと、そこにはもちろん母の胸へのあこがれがあらわれてくる

涙もろき母と風呂焚く星の下

手袋を脱がずに母を抱きにけり

編みかけのセーターを背に当てられる

それはまた直ちに彼の浪漫化の第二の内容であるところの妻子への愛情や、そして社会教育の仕事を通して観察された若者たちへの関心となつてあらわれる。それを観念的な愛情表現だけでなく、肉体を通した、官能的とさえ思わせる具象描写をもつて、若々しい飾りけのない姿で見せてくれる。第Ⅱ部は、樹氷君の家庭形成期の百五十句、そして第Ⅲ部は、最近の連作風の秀作を含めた

八十句、ここでは特に、すっかり成熟した彼の眼光を感じとることができる。

看護婦と療養貴族焚火せり

みとりし君とみとられし僕の紙風船
みかえれば拍手また湧く爽やかに
かなかなや逸朗も身をかためます
くちづけは獣めくもの河瀬るる
シクラメン男がもてば汚れやすし
相聞の旅の浴衣を重ね置く
肉体のとある部分の鍵冷ゆる
おきし掌よおかれいし掌よ春の闇
スケート履く乳房に若き膝当てて
乳房濡ればようやく海へ泳ぎ出す
リュック下す小女等胸を仰向かせ

天瓜粉ふぐり叩きて終りとす

五月待つ髪型思いつきり詰めて

など、実に健康的で新鮮で、きれいな愛情に満ちている。これらの句はこの集の圧巻であつて実に魅力がある。樹氷君は『紫』の人気作家なのであるが、その人気は、まさに彼のこうした若々しい生命力から来るのであらう。

最後に、更にもう一步、樹氷君がひそかに到達したいかにも『紫』の作家らしい境地がある。それは次のような作品によつて代表されるものである。

カタツムリチニオチジュモンノコシケリ

嘘ついて寒の唇裂けにけり

空間が凍らぬうちの点を打て

それはいえぬもののひかりよささめゆき

春愁と思えば大いなる海よ

大根抜く眩しき海を引きよせて

火吹竹むかしむかしの火を覗く

茸山昏れて物語りが残る

白と黒と黒と白との棟朧

雪煙立てねばならず汽車走る

届かぬもの例えば雪の叫び声

これらの作品は、簡単に技術だけで出来るものではない。これらの作品で作者の位置は、現実から少くとも壁を一重隔てた密室のなかにあつて、そこで耳を澄ませ、心の眠をひらいて、世音を感じているのである。ここには現実への甘えた姿勢は見られない。現実に溺れず、現実を一応突き離している。すなわち、虚に居て実を行なっている。虚実皮膜の間という境地であるが、それが定着すれば樹氷君の作品は更に大きな変貌を遂げるであろう。その美しい片鱗がこの集のなかにかくもありありと現れているのを、私は祝福したいと思う。

紫主幹

関口比良男

私と樹氷君

石井樹氷君と私とは、かなりの共通点を持つている。それは、川口に育ち、ハーモニカに憑かれ、俳句を愛し、いろいろな文化運動に尽したことである。

違う事もある。君は才能をぞんぶんに發揮し、邁進する。しかも君は羚羊のように俊敏であり、私は牛のように鈍重なのである。

その二人が、もう三十年近くも、意見が割れた事は一度もなく、親しい関係がずっと続いている。それは、お互いがお互いを理解し「それでいいんだよ」

と、黙つていても認め合える仲だからだと思う。

樹氷君にはずいぶん色々なことを頼んだ。文化団体のこと、文化祭のこと、そして学校保健でも、素張らしい手腕を見せてくれた。

それなのに、私の方はせいぜい仲人をしたくらいであとは何もしていない。で、俳句については、君の傾倒している比良男先生の序文で充分なのだが、私も何か蛇足を付け加えさせて頂くことにします。

第Ⅰ部

排菌者真赤な金魚買つてくる

ポチ轢かれ霧が重たい木曜日

春愁の肋骨女医に叩かるる

枯木斬られ禱るものみななくなりぬ

雪の病室遺愛の知恵の輪一巡す

父が撒く豆を総身に浴みて臥す

ジングルベル仰臥の胸に指奏でる

青林檎癒えし胸にて二ツに割る

これら療養時代の作品は懐かしく、又『樹氷俳句』の誕生でもあり、作者の心が私達に強くひびいて来る。

第Ⅱ部

この時代の作品は、次のような家庭を歌った作品

兎のこどもが怖い夢みた十三夜
ペンペン草力む母見て兎が糞る
編みかけのセーターを背に当てられる
葱臭い手でネクタイを直される
それに仕事を歌った次のような作品

電球に指あたたためてガリバン切る
美しく汲まるる 鋳物始めの火

があり、作者の心は、家庭と職場にあつたようだ。ただ

肉体のとある部分の鍵冷ゆる

には内容的に深いものがあるのは面白い。

第Ⅲ部

エプロン白き妻と撮らるる文化の日

天瓜粉ふぐり叩きて終りとす

秘書薔薇を捧げて市長室に入る

家庭に職場に、作者の生活は、ようやく安定を見せて来る。その生活の安定がいい意味で、作品に現われている。『秘書の句』など、今迄の樹氷作品に見られなかつた句境と思う。

次の『雪の旅』十五句は、これまで貯えて来た句作の力と、新らしい作品の情熱とが一体となつて出来たものとして、高く評価すると共に、今後の樹氷作品に大きな期待を持てるものと考ええる。

汽車笛は哀しきものよ雪の旅

雪が怖いだから怖い黄昏れ

雪であるただ一本の線を引く

翩翩と雪野を僕の旗がゆく

俳句は年令と共に変化する。樹氷作品もその例外ではあり得ない。『雪の旅』は今後の一つの示標となる注目すべき作品となろう。

療養時代に君は才能を認められながら天才と迄はいわれなかつたが、もつと病気が悪化していつたら…… 或いは天才となつていたかも知れない。

病気が進めば俳句も進む、いのちと俳句。「生きていてよかつたね、樹氷君

と私は確信を持つて言う。

俳句は人を現わすと言われております。今後ますます人間完成への道、美の探究への道、そして君の好きな童話の世界への道を進まれて、更により作品を見せて頂きたいと心から希つております。

曲水同社 高木雨路
曲水川口支社 主宰